

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです
目の前の仕事に全力で励めなければ、未来は来ない。

至誠。誠心誠意尽くすという言葉です。吉田松陰はある日、塾生から尋ねられます。“志というが、自ら志になかなか気づけない人は、どうして志にたどり着けばいいですか？”松陰の言葉は明快でした。「毎日毎日、やらなければいけない決められた事を全力でやりなさい。勉強する、掃除をする、庭の草取りをする、それを続けるうちに・・・」必ず自分が胸ときめくこと、ワクワクすること、自分はこれをしているときが一番楽しいな、と思える何かにぶつかる。「それが真骨頂、君の長所だ。自らの長所を活かすように生きる。それが志へと導いてくれるのだよ」自らの真骨頂を得た後、工夫の道につくべし。つまり、目の前の決められたことに全力で当たる。そのうち、必ず長所に気づく。そうしたら、その長所を活かす道を考えよ、という意味です。これを、「至誠に基づいた生き方」と松陰は考えていました。人間には、“飽きる”という特性があります。大切だとわかっていても、毎日していることに飽きてしまいます。「事業とは、お客様の飽きとの戦いですよ。だから、いまを踏まえて、新しい価値を日々付加しなければならないのです」和洋菓子、アイスクリームのフランチャイズ企業集団を一代で築いたシャトレゼ・斉藤寛会長に教えられたのは、入社してすぐのことでした。「しかし、今やるべきことを捨てて新しさに走ると、これがまた失敗の元。今やるべきことの上に積み上げるんだよ」入社一年目。毎日斉藤寛会長の自宅に泊めていただき、そんな話を地ワインを飲みながら聞かされていました。ある日、同期の友人が船井先生に話がしたいと言います。聞くと、素晴らしいコンサルティングの商品を考えたので、船井先生に話を聞いてほしいとのことでした。彼は空港への出迎えについてきて、船井先生の隣に座りました。午後9時の阪神高速は思いのほか空いていましたが、極力ゆっくりと宝塚に向かいました。「なるほど良いアイデアだな。形になれば面白いね」ひと通り説明を聞くと、船井先生はそう言って彼がつくった企画書を、また表紙から見はじめた。「ぜひ、この企画に挑戦してみたいんです。いまは、やることを先輩からどんどん指示され、時間がとれません」そうか。そうだろうな。船井先生が低く呟くのが聞こえました。「入社してすぐにこんな企画を考えてすごいな。優秀だ。君なら、いまの仕事をしっかりこなして、この企画を深められると思うよ」いや、しかし。と言う彼に、先生は優しくこういったのです。「すごい仕事をする人間はね、未来のあるべき姿をしっかりと考えている。君のようにね。しかし同時に、いま、ここで期待されて自分を裏切らないものだ」目の前の仕事に全力で励んでいる人間には、自然と未来が近づいてくるんだよ。宝塚の自宅で先生を見送り、半時間後には居酒屋の紫煙のなかにいました。「何か煙に巻かれたみたいだなあ。どう思う」いや煙に巻かれたんじゃない。船井先生は自分たち新入社員に可能性のことを語っていたのだと思いました。「目の前のことをいまは何でも体験してみろよってことだよ。いい企画だと社長は言っていましたしね」いまと未来—この瞬間が必然的「いま」だとすれば、そのいまから学ぶなかに、よりよき未来への道があるはずなのです。しかし、未来をいまという見地から眺めれば、雲へと続き、途中から見えなくなるこの道が期待する未来への道か、不安が湧きます。大丈夫。この道は、必ず君の期待する未来へと続いているよ。だから、“いま”から学んだ。船井先生は、飽きることなく、私たちの未熟な問いかけに答え続けていたのだと気づきます。至誠で日々を送る。決して飽きることなく。やがて期待すべき未来へと進むために・・・それは、人生、教育、経営、すべてにおける王道だと思います。

シャトレゼ・斉藤寛会長に教えられたのは何ですか？

()

松陰は弟子の質問にどう答えましたか？

()